韓国における日本文学研究の状況と展望

崔　在喆

一、日本研究の環境の変化

韓国で本格的な日本研究が始まる一九九〇年頃までは、日本研究の体系的な専門書はその数が限られており、一般的な〈日本論〉が約四〇冊、翻訳書三〇冊程度で、それらも主観的な感情に偏り、反日的な内容や復古的な郷愁、または経済発展の賛辞を結論としてまとめてあるような書物が大部分であったという反省の声があった。[1]また、客観的に日本の実情を把握しようとする冷静な態度が必要であるという論議は幾度も交わされている。歴史の被害意識にいつまでもこだわることはないが、韓日間の過去の歴史に対する日本の徹底的な反省と清算が期待に満たなかったという意見が多いのも事実である。

韓国人の対日姿勢について要約すれば、植民地時代の一部の〈親日〉、そして戦後の〈反日〉から、日本を克服するという〈克日〉へ、さらに〈知日〉へと変わってきたと言える。

一九六〇年代前後まで　：　日本嫌い、無関心〈反日〉、日本研究も進まない

一九七〇年代以来八〇年代中半：　日本を理解する必要性の認識〈克日〉、日本語の学習段階・実用的な目的の日本論

一九八〇年代中半以降九〇年代：　専門別研究者の増加〈知日〉、日本研究の本格化へ。

日本研究が予想より遅れたのは、日本語教育と学習の目的が実用のためである場合が多く、韓国一般社会の日本に対する雰囲気が未熟で研究への使命や責任を果たせなかったのも一因である。以後、既成の日本の研究を踏襲する段階から研究蓄積の期間を経て独自な研究へと移行するものと期待される。現在は、植民地時代に日本語を習った日本研究者第一世代が引退し、第二世代のハングル世代（四〇～五〇代）特に韓日国交樹立（一九六五年）以後一九七〇―一九八〇年代に日本へ留学した研究者たちが日本研究の中心を担い、主体的で独創的な日本研究を新たに模索するこ

とが課題となっている。

日本研究の最近の主な動向としては、韓国日本学会の『日本研究叢書』〈日本の理解〉シリーズ刊行（二〇〇一年）と、韓国外大日本研究所の『日本研究』（第二三号、二〇〇四年）発行、翰林大日本研究所の翻訳書シリーズ『翰林日本学叢書』（一〇〇冊企画）と熊進出版社の小説翻訳『二〇世紀日文学の発見』（全一二巻）、ソウル大国際地域院の『韓国の日本研究：二〇〇〇年研究動向』刊行、韓国日語日文学会の『日本文化叢書』（全六巻、二〇〇三年）などが世人の注目を引いている。

最近の韓国の日本語学習者、日本研究者の数はその歴史以来最大に達しており、しかも若手が多いので、これからが期待できそうだ。日本では欧米の日本紹介や研究を大きく取り上げることがあるが、隣国である韓国や中国・ロシアの日本研究への関心度は低いと言える。

日本における韓国ブームの時期は、明治初期と韓日併合前後、そして、一九八八年ソウル・オリンピックと二〇〇二年サッカーW杯韓日共催（「二〇〇二―韓日国民交流年」設定）などであるが、ここ十年余は大体韓日親善ムードが続いていると言えよう。特に、この頃日本における韓国ドラマ「冬のソナタ」の人気に続くいわゆる〈韓流〉という韓国への関心の高まりや韓国語の学習熱と文化交流の活性化は、〈日韓友情年―二〇〇五〉に向けて大きな役割を果たすものと期待されている。今後も時にはぎくしゃくすることはあるだろうが、このような友好関係を生かしていくことが望ましい。

一九九八年一〇月、首脳会談の「韓日共同宣言行動計画」で、文化交流と青少年交流の発展を推進し、日本の大衆文化の開放が決まった。韓国で日本の大衆文化の輸入開放に関する議論の焦点は日本映画・アニメ・漫画の暴力性や淫乱性の問題と貿易赤字の懸念にあったが、日本の大衆歌謡等の人気は衰えることがなく、実際にドラマなどの文化交流を促進する結果になった。ここ数年間、韓日の文化交流を巡る環境が大きく躍動的に変化し、活性化してきた。映画・舞踊・演劇等の文化芸術交流の拡大は韓国社会全般の雰囲気と対日イメージの改善に繋がっているし、日本の対韓イメージの改善にも好ましい影響を与えている。

現状の認識と今後の展望について考えてみると、韓日関係は互いの先入観、偏見、無関心など〈無意識のブレーキ〉により、時には歴史認識・貿易・漁業・独島（竹島）問題など利害関係に関わった摩擦もあろうが、隣国同士で理解し合うことが何よりも大切であるとの認識には異存がないはずである。活発な文化交流と相互理解のためにマスコミや教育現場の役割は重要で、その影響力は大きい。そして、市民団体・民間レベル・青少年の交流を通じて友好的にふれあい、日本ファンの韓国人・韓国ファンの日本人が増えつつあるのはたのもしい。現状認識が希望的なのは国際環境と国際化、社会の成熟や世代の交代に負うところもある。互いのアイデンティティを尊重し、互いの長所を学ぶという姿勢を持ってこそ真の相互理解へ近づくことが出来ると思われる。[12]

古代以来近世まで日本が韓国に対してそうであったように、近代以来の韓国は常に日本に対してライバル意識を持ち刺激され、経済・スポーツなどの発展の原動力としてきた側面がある。韓日関係ばかりではなく、日本と北韓（北朝鮮）、周辺諸国との関係など、総合的に考慮しなければならないし、純粋な意味での相互理解者、知日派・知韓派の拡充とその努力が必要である。歴史的・地理的に見て、韓日両国は相互を最も理解しやすい立場にありながら、今まで互いに誤解してきた側面もあるのではないかと思う。隣国同士で共に繁栄する方法を見つけなければならないし、両国発展のために互いに自主独立を守り、第三者の眼から見ても正当な認識を堅持するという方針が大切だと思う。

二、日本語教育の歩みと現況

一九六一年、国内で初めて韓国外国語大学に日本語科が設立され（韓日国交成立は一九六五年）、一九七三～一九八五年の間、全国四九大学に日本語関連学科が設立されている。一九七三年、日本語が高校の第二外国語として採択され、一九八六年以来、日本語を選択する学生数が最も多い。一九九八年末、高校の日本語学習者は第二外国語全体中の四三%、一般系三〇万人（二七%、ドイツ語　四五万人・フランス語　二七万人・中国語　約八万人）と実業系四三万人（八七%、ドイツ語　約三万人・フランス語　二万人・中国語　一万五千人）で、日本語を選択した高校は総七五〇校、日本語教師は一一四〇人である。高校の第二外国語に加え、最近、中学での日本語教育が開始された。[2]

一九九八年末現在、日本語日本文学関連の学科を設置した大学数は、四年制で八四校（一〇二学科、全体一八七大学・二二七キャンパスのうち）、短大は六七校（日本語科・日本語通訳・観光日本語科など一一二学科、全体一五九短大のうち）で、最近は学部・大学院に地域学としての「日本学科」の設置も徐々に増えている。

専攻学生数は年間約四千人（総一万六千人）で、大学での日本語学習者数は推算一五万人以上である。専任教員は約六〇〇人、非常勤講師は約一千人である。世界の日本語学習者数は一九九八年の〈国際交流基金の調査〉によると、二一〇万人で、その内半分近くの九五万人が韓国人である。日本語学習者が最も多いのは、日本の隣国として人的・物的な交流が盛んであり、商業・貿易など実用的な理由と大衆文化に興味を持つ若者の増大のためである。日本の場合、韓国語学習者の数は最近増えつつあるが、韓国との格差はなお大きい。

大学院の日本関連学科は一八以上の大学に、教育大学院は一八大学に、特殊大学院（通訳・国際・地域）は五大学に設立されている。例えば、韓国外大の場合各部門の年間入学生数は、学部（日本語科一〇〇人＋四〇人、二つのキャンパス）と、大学院（日語日文学科　約三五人・日本学科　五人）、教育大学院（日本語教育専攻　約四五人）、通訳翻訳大学院（韓日科　約一五人）、

国際地域大学院（日本学科　八人）等、あらゆる分野を包括する学科を設置し、韓国で最も日本関連学教育の歴史が長く多数の人材を養成している。

三、日本文学関連学会の動向

韓国で日本文学関連学会は一九七三年設立の韓国日本学会と一九七八年設立の韓国日語日文学会（会員は各々約一千余人ずつ、重複多数）が代表的で、この他に、日本関連（主に日本語日本文学研究が中心）の学会が一五余りあり、それぞれ学会誌を発刊している。今後は具体的な専攻分野別（例：一九九九年創立された韓国日本近代文学会等）に学会が専門化され、研究をさらに深化していく必要がある。

韓国日本学会には同学会編の翻訳書『日本文化叢書』（全八巻、一九七七～一九八〇年）『日本思想叢書』（全七巻、一九八九年）と、『日本研究叢書』（既刊一〇巻、二〇〇一年）等の業績があり、韓国日語日文学会では『日本文化叢書』（全六巻、日本語学・日本文学・日本文化　各二冊、二〇〇三年）を刊行している。

ちなみにこのうちの、日本語学の動向としては、研究者が六五〇余人、単行本五〇冊、研究論文総一五〇〇余編（修士・博士学位論文三〇〇余編を含む）で、一九六〇年代は一〇余編、一九七〇年代以後とりわけ一九八〇年代に急増し、日本語の文法研究が五二〇編と最も多い。日本語で作成した論文が全体の半数を占めるのが特徴である。[4]

（＊統計は時期・選択基準により異同が有り得ることを断っておく、以下同じ。）

四、日本文学の翻訳紹介と研究傾向

日本文学の翻訳は一九六〇―一九六一年の『日本文学選集』（第三巻に「羅生門」、青雲社）と一九七五年の『日本文学大全集』（第一〇巻が「日本名短編選集」、東西文化院）が一応のまとまった紹介の始りと言える。また、韓国の世界文学全集に日本の作家が含まれたのは、一九七〇年の『世界の文学大全集』（同和出版社）に川端・太宰・三島・芥川の作品を載せたのが初めてであろう。

以前は三浦綾子の『氷点』と遠藤周作の『沈黙』等宗教関連物や司馬遼太郎の歴史物、五木寛之の『青春の門』等の大衆小説が読まれ、川端康成・夏目漱石・芥川龍之介・三島由紀夫・太宰治らの作品が主に翻訳紹介された。例えば、漱石の作品は一九六二年以来、代表作を含む二九編が翻訳（総数九〇余編、この内約八〇％は一九九〇年以後刊行）されているが、特に『吾輩は猫である』『こころ』『坊ちゃん』『夢十夜』『永日小品』等が読まれている。[5] 一九九〇年代からは村上春樹（『ノルウェイの森』の場合『喪失の時代』の名で十余年間一〇〇刷のロングセラー）や吉本ばななのほとんどの小説が翻訳され若者に広く支持を受け、大型

書店の売れ行き上位を日本の現代小説が占める場合が度々ある。韓国の読者はこのような小説の軽快さ、感覚的な大衆文化に同質感・連帯感を覚え、同世代としての感覚を共有している。この部類の作品には日本的要素が薄く、新世代の読者が特に〈日本〉を思い浮べることはないし、〈反日〉のこだわりもほとんどなく、自由を楽しんでいるのである。[6]

日本文学の研究動向を数字で示すと、一九六〇年代の研究論文は七編、一九七〇年代一三二編、一九八〇年代毎年約一〇〇編、総八九〇編になる。このうち、近代・現代文学論が約六五%、研究者数も三二〇人で約五〇%以上（日本文学研究者総六三〇人）を占めている。古典文学では『源氏物語』や『徒然草』、芭蕉・西鶴・秋成等が主に研究されている。[7]

『古事記』と『源氏物語』（一九七五、一九九九年訳）『徒然草』等の韓国語訳はすでに出ており、これらに対する研究や韓日神話の比較研究も進められている。例えば、『源氏物語』研究は一九九一年までに一六編程度であったが、二〇〇四年一一月現在二二九編となり、構成・構想・主題に関する研究が最も多く約半数を占め、人物論・表現論・その他の研究が続いている。[8]二〇〇四年現在、日本近世文学研究の現況は著書一五冊（日本学・比較文学研究を含む）と訳書二冊、論文約五〇〇余編（一九九〇年は七〇余編）、この内、芭蕉研究が八〇編と最も多く、その次が西鶴七〇編と秋成五五編、近松を含む劇文学四〇編へと続く。俳諧研究は一九七〇年代に始まり、単行本『俳句文学研究』（李御寧、一九八六）発刊と一九九〇年代末以後、芭蕉や蕪村の俳諧の翻訳書が刊行されている。

一方近代文学分野では、初期は韓日比較文学研究が半数を占め、一九八〇年代までに韓日近代文学の比較研究は約三〇%である。国内外の大学院卒で論文を発表した韓国人日本文学研究者八〇〇人の論文総数約二三〇〇編の中で、近代文学関連の論文がやはり半数以上を占めている。日本文学関連の単行本は一九七〇年代五冊、一九八〇年代は比較文学研究を含めて二〇冊程度だが、一九九〇年代に入って増えつつあり、単行本は延べ三九冊（編著と比較文学書を含む）、文学史等の翻訳書は一一冊である。[9]

近代の作家では漱石・芥川・鷗外・藤村・太宰・川端などの研究論文が多い。韓国内の六つの学会の日本近代文学論文総二八〇編中、前記上位五人の作家関連の論文が四〇%を占めている（二〇〇〇年五月）。（他の調査は、漱石・芥川・藤村・川端・太宰・啄木・鷗外の順。[10]）文学史において知名度の高い作家と翻訳紹介されている作家の研究が多い。[11]川端研究の場合、一般論文の数は一五〇余編、修士論文は六五編で、作品論が三分の二を占めるという最近（二〇〇四年一〇月）の統計がある。

以上の統計のうち、近代詩歌文学やプロレタリア文学の研究は少ない。プロ文学の研究が少なかったのは韓国の南北問題と関係があると思われる。最近、島崎藤村と有島武郎、遠藤周作に関する論文の数が伸びつつあるのは韓国にキリスト教人口が多いのと関連がありそうである。また、同じくノーベル文学賞受賞作家で

はあるが川端に比べて大江健三郎の研究が伸びないのは、時間の経過の短さと翻訳調の難渋な文章のためもあろうと思われる。一九九九年までの鷗外研究論文は五〇余編、研究者は二〇人ぐらいであり、漱石研究論文は二六〇余編、単行本は一一冊である。これに比べれば、近代詩歌分野の研究が啄木を除いて数少ない中で、萩原朔太郎・高村光太郎・三好達治・宮沢賢治・正岡子規などの詩歌論が徐々に書かれている。

ちなみに、韓国外国語大学大学院の日語日文学科の学位授与現況（一九七六年二月～二〇〇四年八月）を見ると、日本語学・日本文学を合わせて文学修士は総四二〇余名で、文学博士は一九八一年三月博士課程開設以来総四〇余名である。（韓国における日本文学専攻の文学博士第一号は一九九四年二月の「正岡子規の短歌研究」）このうち日本近代文学分野の修士は総一二〇余名で、博士学位授与者は一〇名である。この外に、教育大学院日本語教育専攻課程の日本近代文学分野の修士四〇余名を輩出している。以上の学位論文は作品論が中心であり、これからは各主題別研究の必要性がある。戦後文学の研究は始まったばかりであり、近代詩歌文学と戯曲の研究は数少ない。韓日文学の関連様相や比較研究、大衆文学にも目を向けようとしている。

専門分野別・ジャンル別学会や研究会の活性化が望まれる中で、韓国日本近代文学会が設立（一九九九年）され、専門分野の学術誌としては初めての『日本近代文学―研究と批評―』を二〇〇二年創刊し、二〇〇四年第三号を刊行している。作家別の研究会は〈夏目漱石文学研究会〉が研究発表会と単行本の刊行等の活動をしているくらいで、他にはまだ主立ったものはないが、これから各作家の研究者が増加すればそのような動きは自然に広まると予想される。また、作家別翻訳全集が期待されている。すでに一九六九年『川端康成全集』（全六巻、新丘文化社）と一九九六年『大江健三郎小説文学全集』（全二四巻企画・一〇余巻刊行、高麗苑）があるが、それぞれノーベル文学賞受賞直後で、実際は「選集」水準のものである。作品の翻訳には適切な注釈と解説を加えることと、誤訳点検の必要性が生じている。

比較文学分野では神話・説話や近世小説の韓中日比較研究が行われている。また、新羅郷歌を通した万葉読みの可能性という問題提起は今なお有効であろう。但し、本格的な実証的研究の持続が期待されよう。近代文学の韓日比較研究については、すでに金允植の『韓日文学の関連様相』（一九七二年）以来その可能性が開かれ、漱石と李光洙、有島武郎と金東仁或いは廉想渉との影響関係の比較文学的研究や対照研究が行われている。また、日本文学における韓国（人）のイメージに関する研究も増えており、在日韓国人の日本語文学に関する関心も高まって、いくつもの研究業績が出ているが、今後もこのような分野の研究者が益々増えることが予想される。

五、日本文学研究の課題と展望

韓国における日本文学研究は日本に見習い、研究者が時代別に分かれており、ジャンル別・作家別に区別する意識が強い。研究方法も文献学的・注釈学的・実証的方法論が好まれている。しかし、日本留学を終え帰国した研究者は研究資料や参考文献の不足などによる恵まれない研究環境の下で苦労することになる。また、日本古典文学の分野は研究を共有できる読者・学生が少ないため、日本での方法論だけでは受け入れられない場合がしばしばある。このような障害を乗り越える一つの方法としては、韓国の実情に合った方向性を見極めながら、韓国人の観点から新たに照明を当てる方向として、テキスト分析に重点を置き、時代とジャンル・作家に共通する主題の研究、或いは韓日比較文学的研究や学際的な研究などに着目する必要がある。

また、代表的な日本古典の専門研究者による徹底した注釈と解説付きの翻訳を出すのも課題の一つであり、『万葉集』の翻訳や〈新羅郷歌〉との関連性の究明は大きな問題であろう。『源氏物語』等大作の全体像を見る方法を考えることと、韓国内の先行研究の認知や引用・批評の必要性がある。学部での日本古典科目の忌避現象と相まって古典専攻者の採用極少化の問題が懸念されているが、このような時流を乗り越える適切な方策が待たれる。

俳諧の翻訳に関しては、季語の訳に困難なものがあるということと、五・七・五の音数率を無視してもいいか、或いはどのように生かすかが課題である。研究者の間では音数率を守るのが普通であるが、詩人や一般の翻訳では守らない方が多い。筆者の考えでは、日本語と韓国語は語順や漢字語彙が類似しているため、できるだけそれを俳句の翻訳に生かし、音数を合わせるのが好ましいが、場合によっては音韻のリズムを考え、無理をする必要はないと思う。また、俳句と韓国の伝統詩歌である〈時調（シジョ）〉との比較研究の模索や、日本における俳句の人気を鑑み、時調の発展と大衆化への道を探求すること、また、〈韓国語俳句〉の可能性についても考えてみる必要があり、俳句は韓日の文化交流と相互理解のために効果的に活用できる格好の素材であると言える。

論文を日本語で書く場合が日本語学と日本古典文学研究の分野に特に多いが、韓国での日本研究の一般化と自国化を遅らせる理由にもなっていると思われる。韓国語で論文を書く場合は日本語の表記、特に文学作品名のハングル翻訳・表記がまちまちであるものが多いが、これを統一する必要がある。日本文学研究において独自的な研究の発展が望まれる一方、国際的な学術交流も必須であろう。そして、韓国における日本文学研究が韓日相互理解を深め、善隣友好関係を保つために寄与することを期待している。

注

（1）「日本専門書がない」、「朝鮮日報」、一九九〇・八・一六。

(2) 一寸木英多良、「日韓文化交流の現状と展望」、『日本研究』(一五)、二〇〇一・二・参考。
(3) 『韓国の日本語教育実態—日本語教育機関調査一九九八—一九九九年—』、韓国日語日文学会、一九九九・二・参考。
(4) ィ・ハンソップ、「韓国の日本語学研究どこまで来たか」、『日本学報』、韓国日本学会、一九九三・三。
(5) ゴン・ヒョッグゴン(外)、企画テーマ「韓国における日本文学研究の成果と課題の照明」、『二〇〇四年度韓国日本学会傘下学会合同学術大会Proceeding』、韓国日本学会、二〇〇四。
(6) 『時事ジャーナル』、一九九九・七。
(7) チョン・ヒョング、「韓国における日本文学研究の成果と課題」、『日本学報』一九九三・三。
(8) キム・ジョンドク(外)、企画テーマ「韓国における日本文学研究の成果と課題の照明」、前掲書、九九—一〇〇ページ。
(9) 「韓国日語日文学研究文献検索システム」、韓国日語日文学会、一九九四・四。
ゴン・ヒョッグゴン、「韓国における日本文学研究現状」、『日本学年報』(六)、一九九四・一二。
(10) ィ・ハンソップ、『日本文学関係研究文献一覧』、高麗大出版部、二〇〇〇。
(11) キム・ジョンドク、「韓国に於ける日本文学研究の現況と展望」、『日語日文学研究』(四五)、韓国日語日文学会、二〇〇三・五。

(チェ・ジェチェル　韓国外国語大学校教授)